国　語　科

武　田　優　実
須　賀　　学
櫻　井　真　理
大　山　宏　樹

Ⅰ　研究主題と国語科

１．研究主題のとらえ方―教科の「目指す生徒像」

国語科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、３年次の実践に取り組んできた。

【国語科の目指す生徒像】

> 日本語がもつよさ・特性・価値や、伝え合う喜びを実感し、
> 　　目的や場面、相手に応じてより豊かに、適切に言葉を受け取ったり使ったりする生徒

国語科は、様々な事象について、言葉を通した理解や表現および言葉そのものについて学習するという特質を持つ教科である。本校ではその具現化のために、言語活動を通じて付けさせたい資質・能力を明確にしながら、課題解決的な授業づくりを行ってきた。生徒が自ら次の学習活動に向かおうとする意識を基盤としながら「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の育成を図っていくことを目指している。言語感覚を豊かにしていくことで、正確に理解したり適切に表現・伝達したりできるようになるとともに、新たな考えを創造したり、思考や想像の幅と奥行きを広げたりすることのおもしろさに気付き、言語運用能力を高めようとする態度が育つと考えている。そしてその能力は、目的や場面、相手に応じたねらいに基づいて、内容や程度について追加・補足や訂正・削除をする姿となって、時には高次なものを求める姿となって表れるものだと捉えている。

【３年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・考えを深めたり、より豊かに適切に伝え合ったりするために、解釈・取材・表現・推敲などを繰り返していこうとする姿勢	・付けたい力、言語活動、教材の特性の整合をとる。
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・目的や場面、相手に応じて、必要な情報を得るための方法や相手などを選んだり、情報をより豊かに適切に伝えるための材料や手段を探したりする力	・生徒が課題意識や見通しを具体的に持ちやすい言語活動を設定する。その際、生徒が試行錯誤したくなる場面を想定する。 ・自由度の高いワークシートやノートを用いて、問いや課題の解決のために用いた方法や思考過程を振り返らせ、必要に応じて助言する。
場に応じて判断基準をつくる力	・解釈した内容やその根拠として選んだり関連付けたりした情報が適切であるか、あるいはふさわしい内容や表現、構成になっているかを、目的や場面、相手を総合的に考慮しながら判断する力 ・自身の思考の過程や、これまでの言語生活や読書生活、情報活用の仕方などを振り返り、変化した点や改良を加えられる点などを見付ける力	
学びを評価し、課題を見付ける力		
より豊かに理解や表現をするための語感・語彙の力	・創造的・論理的に考えたり、感情や想像を表現したり、それらを適切に伝え合ったりするために、言葉を使い分けられる力	・古文や韻文の創作単元を意図的に組み、辞典を活用させるなど新たな語彙に触れられる機会を設ける。また、語彙手帳など、新たに出会う語句へ着目できるような環境をつくる。

２．研究のあゆみ

前研究における国語科の課題は、思考が変化、深化していく過程や学びの有用性を生徒自身が十分には認識できていないことと、よりよい考え方や表現などを求めていく姿勢が物足りないことであった。そこで本研究では、一人一人に思考の過程に立ち返って学びの自覚をさせることと、自ら意欲的に探究し続けていくための効果的な手立てを開発することを重視する。

１年次は、生徒が目的や場面、相手を意識しながら主体的に思考・判断・表現を繰り返したくなるような単元づくりに重点を置いた。２年次は、言語活動を通してどのような思考の過程をたどっていったのかに着目させ、そこで得た学びを自覚させるために効果的な手立てを考えることに重点を置いた。３年次は、付いた力や学びの実感を得られるために、生徒が見通しを持ちながら主体的に取り組むことができる言語活動の在り方に重点を置き、ここまでの研究を進めてきた。

３．教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

○付けたい力や教材の特性に合った言語活動が設定できた単元では、生徒が必要に応じて自ら学習過程を行き来しながら読み返したり、表現の仕方を吟味したりする姿が見られた。その際、教材として扱う文章の種類や特性を意識させることが、読書生活との関わりを生徒が実感する上で効果的であった。

▲他の単元での学びが生かせる場面を意識しながら単元の設定を行ったが、情報を得るための方法や相手を選んだり、情報を伝えるための材料や手段を探したりするために教師の補足や導きが必要となる場面が多かった。その結果スモールステップを踏まざるを得なくなり、生徒が自由に読み進めたり、途中で解釈の妥当性に立ち返ったりできなかった単元もあった。まとまりある言語活動の中で生徒が知識や技能を課題解決に向けて生かせる単元の設定を行う必要がある。

○生徒が課題意識や見通しを具体的に持ちやすい言語活動の中では、解釈した内容や表現したことなどについて、目的や場面、相手を総合的に考慮しながら、適切かどうか、あるいは、ふさわしいかを判断し、表現し直そうとする姿が見られた。特に「読むこと」の領域において、自分が捉えたテーマに基づいて読書紹介に引用する描写を選んだり、説明的文章の対象となる読者を自分で想定した上で説得力を評価したりするなど、読みの多様さを生徒とともに大切にしていくことが有効であった。その際、課題解決に向けた学習の姿を具体的・個別的に授業者が想定しておくことで、活動ありきにならず、付けたい力に沿った助言や補足ができることがわかった。

○枠を限定しない、自由度の高いワークシートやノートを用いることで、考えたことや関連付けたことが表出され、生徒が自身の思考の過程にも着目するようになった。それにより、生徒が自身の変容を自覚したり改良点を見付けたりすることにつながった。授業者も、毎時間や単元を通した生徒の手応えを捉え、指導に生かすことができた。

▲まとめや振り返りなど、生徒にとって必然性のない記入を強いることで生徒に負担のかかる場合が生じた。生徒が必要を感じたときに記述させることが自然であり、自身の学びを自覚する上で有効であることが分かった。また、授業者の評価として、言語活動を通して、生徒のどのような学習の状況を評価するのかを具体的に想定した上で、効果的なワークシートの活用や振り返りのさせ方を吟味していく必要がある。

○古文や韻文を創作する単元では、生徒が“表現の妙”に気付き、一語一句のもつ奥深さを味わったり、自分の思いを豊かに適切に表現するために試行錯誤したりする様子が見られた。

▲類語辞典を活用させたり語彙手帳に書き込ませたりするなど、日常的に語句へ着目させる手立てをとったが、新たな語彙に触れる機会を設けることが不十分であった。